

気まま随想 ドン・キホーテの独り言 7月

ロシアより愛を込めて ♪ ♪ ♪

青春のモスクワ 白夜のサンクトペテルブルク

高校時代の恩師に感化され

ありがたいことに、私は高校時代の恩師に恵まれていた。もう半世紀も前のことである。夏休みが始まろうとする直前、国語の担任だったK先生が言われた。

「長い休みを利用して、世界文学の大作を読みなさい。今すべてがわからなくてもいい。でも読んだ後は自分が少し偉くなったように感ずるよ。きっと・・・」

そんな言葉に感化されて、私は学校図書館の世界文学全集の棚から3冊の本を借りてきた。トルストイの『戦争と平和』上下2巻とドストエフスキーの『罪と罰』だった。どちらも長編で世界文学の最高峰に位置している作品である。

「今すべてがわからなくてもいい」——その通りだった。ストーリーは面白くても、作者が訴えようとしている深いテーマにどこまで肉薄できたかは心もとなかった。また夏休み中だけではとても読みきれず、秋の読書週間までかかったことを覚えている。

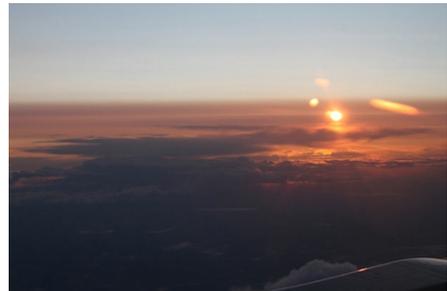
そんな記憶を胸にこの4月、地元の市民図書館からそれぞれの作品を借りてきて再読した。そして6月、定年後のライフワークと定めた「世界文学紀行」の第11、12作目として、両作品の舞台・サンクトペテルブルクとモスクワを訪れたのだった。

二つの空港の格差

6月14日、成田を離陸したロシアのアエロフロート576便は、シベリアの上空を西にちょうど10時間の飛行でモスクワ郊外のシェレメティョボ国際空港に着陸した。先のオリンピック開催が力あったのだろう、明るく近代的な空港である。

ここからサンクトペテルブルク行きの国内便に乗り換え、約1時間半のフライト。降り立ったプールコヴォ第1（国内）空港はシェレメチェヴォ国際空港に比べると予想外に小さな空港だった。

ロシア第二の都市。そして一時はロシア帝国の首都だった空港にしては、あまりにも小さく概観も設備も古く、やや田舎くさく思われた。迎えに来てくれた車が空港の駐車場を出る際にも、でこぼこ道で車が揺れバウンド、車ラッシュなのに駐車料金の精算システムがよく整っていないくて、結構の時間がかかってしまった。



午後10時サンクトペテルブルクへの機中から

白夜のサンクトペテルブルク

モスクワからのフライト機中から見る空は、太陽が地平線残っていて周囲は金色に染まっていた。サンクトペテルブルクに着陸し空港を出たのは午後11時。ホテルに着いたのは12時過

ぎだった。でも、外はまだ薄明るかった。まさに「白夜」である。サンクトペテルブルクは北緯 59 度にある。北半球の日照時間が最も長くなる夏至（6 月 22 日）を前に、緯度の高い地域ではどこでもこうした現象が起きている。

昨年 6 月、デンマークのコペンハーゲンを訪れた際にも同様だった。こちらも北緯 55 度とほぼ同じような高緯度にあるからだ。

『罪と罰』の舞台は今・・・



サンクトペテルブルクでの主要な訪問場所は、まずはドストエフスキーの『罪と罰』の作品の舞台だった。

「一つの小さな罪悪は百の善行によってつぐなわれる」「選ばれた非凡人は、世のため社会のためにそのお金を使うならば、社会的に無価値な人間を殺して金を奪うこともできる」——こんな“殺人哲学”を内に秘めた主人公ラスコーリニコフは、奪った金で世

のために善行をしようと企て、強欲な金貸しのアリョーナ婆さんとその妹を殺した。

だがその直後から心の動揺は覆いがたく、発狂に近い状態になっていく。追及する刑事と息詰まるようなやりとり。やがて売春婦ソーニャによって魂を救われ、最後には自首をしてシベリア流刑に服する。人間回復への強いヒューマニズムが描かれた小説である。

私は登場人物のラスコーリニコフ、アリョーナ婆さん、ソーニャが住んでいたというそれぞれのアパート、それに文中にときどき現れるセンナヤ広場、そして最後にドストエフスキー博物館を訪れた。（詳しくは「名作の舞台を訪ねて」の「罪と罰」のページをご覧ください）

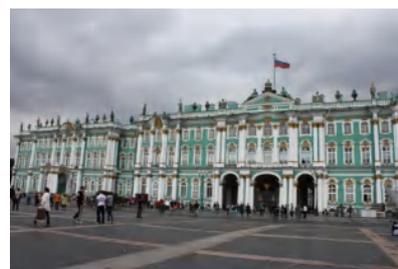
エルミタージュ美術館

サンクトペテルブルクを訪れる人で、エルミタージュ美術館を観光から外す人はいないだろう。世界三大美術館の一つとして絶対的な評価を誇っている。

美術館は宿泊のホテルから徒歩 10 分の至近距離にあった。ネヴァ川に沿うように長く燦然と荘厳に伸びていた。白夜のシーズンには外国からの観光客が集中し、ホテルの値段は上がりその確保さえ難しくなる。

そんな状況下、午後 3 時に美術館に着くと、入場チケット売り場には 100 人余りが並んでいた。我々のように個人旅行者のほか、先生に引率されたロシアの子どもたちや各国からの観光団がその国の言語でガイドから説明を受けている。

入場料は一人 400 ルーブル(約 1200 円)。それに撮影料として 200 ルーブル(約 600 円)。フラッシュは許されていないが、日本の美術書に出ているような作品を自分のカメラで撮影できるのはありがたい。館内は大変な数の見学者だが、廊下や展示室の天井も高くゆったりとした造



壮麗なエルミタージュ美術館



元宮殿だった豪華な内部のつくり

りのおかげでそんなに混雑は感じない。

芸術的な才もなく、美術の知識にも乏しい筆者がコメントするのは気が引けるが、素人の一旅行者としての目からすれば、展示作品そのものでは、フランスのルーブル美術館、スペインのプラド美術館の方が、日本ではよく知られた作品が多いような気がする。エカテリーナ 2 世の“隠れ家”とも言われた宮殿の部屋の天井の高さや、天井が金で塗られ、金色をふんだんに使った部屋（展示室）の華麗さと建物自体の壮観さが人気の秘密ではないかと思った。

青春時代の訪ソを思い出す

6月16日夕方、サンクトペテルブルクからモスクワへ再び空の旅で戻った。

実はもう43年前のことだが、27歳でNHK学園高校の教師だった夏休みに、私は当時のソ連を訪問した。JTB企画の「ソ連ハイライト旅行」。一行はビジネスマン、OL、新婚カップル、学生等のちょうど10人。ロシア語のできるガイドが案内して2週間の旅だった。

忙しい今から考えれば、時間的にはぜいたくな船旅だった。横浜港を出港し東北の太平洋沿岸を北上、津軽海峡を通過し日本海を横断してナホトカへ。1日半のゆったり旅。ナホトカからは鉄道でハバロフスクまで北上。ここから飛行機でイルクーツクへ。ホテル宿泊の朝、バイカル湖畔を訪れた。どこまでも広がる青い湖、清々しい冷気が気持ちよかった。イルクーツクから再び飛行機でモスクワへ。宿泊は「ウクライナホテル」。なんとモスクワ大学の建物にそっくりのスターリングシック建築だった。

物資が不足していた当時のソ連である。フロアー当番の婦人から、私が着替え用に持っていったワイシャツを売ってくれと懇願され、女性用のストッキングを持っていないかと所望されたのには驚いた。サンクトペテルブルクへは「レッドアロー号」（赤い矢）の寝台特急列車だった。定年後だということに、残念ながら今回はそんな時間的ゆとりはなかった。両都市  の往復ともに1時間半の空の旅となったのである。

トルストイの屋敷を訪ねる

モスクワでの主要な訪問地はトルストイの『戦争と平和』の舞台。着いた翌日、まずトルストイが生まれ育ち『戦争と平和』『アンナカレーニナ』を執筆したトルストイの屋敷博物館へ足を伸ばした。

モスクワから約200キロ南下したヤースナヤ・ポリャーナ。片道5車線から4車線、そして2車線、やがて1車線となる比較的整備された道路を、チャーターした4人乗りのセダンでひた走った。カメラマンのN氏、ロシア語通訳のMさん、私、それにドライバーである。

初対面のドライバーはどう見てもアジア系の顔だった。通訳を介して聞いてみた。なんと先祖は朝鮮半島生まれ。本人はハバロフスクで生まれ今モスクワに来て働いている、とのこと。もっと突っ込んで聞きたかったが、なにせ時速110キロを超えるスピード運転。それでも他車

がどンドンと追い抜いていく。(ロシアではスピード制限がないのかしらん?) 声をかけるのを慎んだ。

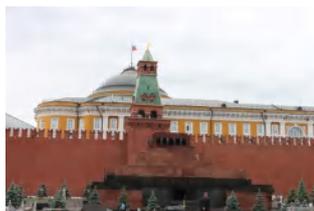
道路の両サイドには白樺の林がどこまでも続いていた。新緑から深緑に、どの木も高さ 10 ㎞を超え日本の白樺より背が高い。その向こうにはまた林や牧草地が広がり、緩やかな丘陵が続いている。いかにも映画で見たようなナポレオン軍が突然、飛び出してきそうな風情さえあった。

3 時間半のドライブで到着した「トルストイの屋敷博物館」は緑に囲まれた広大な敷地の中にあつた。白樺の並木、池、花園……。結婚式を挙げてきたばかりの 5 組を超えるカップルが、屋敷内のあちこちで記念撮影をしていた。

ナポレオン侵攻の跡地に立つて

『戦争と平和』の舞台はあちこちに広がっているが、中心はモスクワとサンクトペテルブルクである。500 人以上の登場人物が織りなす人間の愛憎が綴られていく中で、後半のクライマックスはナポレオンのモスクワ侵攻と退却である。そんな小説の流れと史実を押しえながら、翌日はモスクワ市内を散策した。

まずはモスクワの顔「赤の広場」と「クレムリン」。ストイ博物館、モスクワ大学、雀が丘、そして最後にクルーズで街の表情をカメラに収めた。



続いてトル
モスクワ川

ロシア政治の心臓部クレムリンと、軍事パレードや国家的な記念行事のテレビ放映で大部分の日本人にも知られている赤の広場。パレードの戦車も通るといふ石畳は少々歩きづらい。それでも世界からの観光客が、ロシアの地方からの“おのぼりさん”が広場で記念撮影に余念がない。スパスカヤ塔の頂点にある一つの星は夢と権力を象徴してい



観光客が集まる Gum 百貨店



「赤の広場」とスパスカヤ塔



ロシアらしいお土産が並ぶ

るかのようだ。すぐ近くには、アメリカのオバマ大統領が宿泊した「ザ・リッツ・カールトン・モスクワ」ホテルもあつた。やはりクレムリンは世界政治の中心の一つなのだ。

トルストイ博物館での感慨

博物館は比較的静かな街の一角にあつた。なぜか前日訪れたヤースナヤ・ポリャーナの博物館に比べて訪問客は少ない。我々の約 1 時間の見学中に他の訪問客はゼロだった。でもそれが幸いし、ゆっくりと資料を読み写真撮影もできたのはラッキーだったと言える。

トルストイについての全体的な説明の部屋のほか、『復活』『アンナカレーニナ』『戦争と平和』の作品別の資料を展示した部屋もあった。直筆の手紙や原稿、校正原稿への書き込み……どれも世界的文豪の筆跡だと思えると感慨が深い。出口にあった訪問者の署名簿に、私は今回訪問の思いのたけをやや長文の英語と日本語でしたためた。

(詳しくは「名作の舞台を訪ねて」の「戦争と平和」のページをご覧ください)

幸せなカップルたちの陰に

1812年、モスクワ近郊のボロジノの戦いで勢いをつけたナポレオン軍はそのままモスクワに侵攻した。迎え撃つロシアのクトーゾフ将軍は、直接の戦闘を避け、モスクワを明け渡し後方に撤退した。やがて時が、冬将軍がナポレオン軍を壊滅させるだろうとの計算だった。

「彼ら兵隊の食べ物も馬の飼料も残しておいてやるものか！」と家を去る市民はモスクワに火をつけた。炎上したモスクワ市内に侵攻したナポレオン軍はやがて食料不足に陥った。兵の疲弊も重なり退却を開始した。だが途上、零下数十度の“冬将軍”に襲われ、退却兵は次々と凍死していったのである。

そのナポレオンがモスクワ全体を俯瞰したという雀が丘に私たちも立った。眼下にモスクワ川が流れ、前方にははるかモスクワ市が広がる。丘の広場は何百人という大勢の観光客であふれていた。

と、すぐ近くから一斉に呼びかける声が聞こえてきた。

「ゴーリカ！」「ゴーリカ！」

皆が囁(はや)したてる前方には、真っ白なウエディングドレスを着た花嫁が花婿と熱いキスを交わしていた。「ゴーリカ」とはロシア語で「苦い」との意味。「苦いから甘くしろ！」「うんと甘いキスを！」との掛け声だという。

サンクトペテルブルク、ヤースナヤ・ポリャーナそしてモスクワと訪れた先々で、合わせて20組近い新婚のカップルに遭遇した。そのほとんどをカメラに収めた。若者たちの幸せそうな旅立ちを見ていると、こちらも楽しく幸せになってくる。

歴史の中では、数え切れない数の若者たちが戦場に命を散らした。「平和」であることがいかに素晴らしいものか、あらためて感慨を深くしたのだった。

(詳しくは「エッセイ・コラム」欄の「フォト構成=ジューン・ブライド in Russia」をご覧ください)

モスクワ川クルーズで締めくくる

雀が丘のほぼ真下にはクルーズちも1時間半のモスクワ川遊覧を乗った船は、途中で何艘ものクル曜日の午後5時。初夏の太陽が降強い。屋根のある2階の船べりに



の乗船場があった。私た楽しんだ。100人ほどがーズ船と行き交った。土り注ぐ甲板は紫外線も席をとると、私は移りゆ

く川岸の光景にレンズを向け忙しくシャッターを押した。

川面から見るクレムリンの城壁は、なぜか権威の象徴のイメージは伝わってこなかった。船上では拡声器から歌が流れ、各テーブルではビールを飲み食事をする友人や家族連れで盛り上がっている。見たところ、我々のような外国人観光客は少ないようだ。

「娯楽の少ないロシアでは、食べたり飲んだりしながらのこうした船の観光は結構人気が高いんです」。モスクワに滞在する友人の言葉だった。

ここにも戦争とは全く縁のない、のんびりとした平和な空気が流れていた。私も旅を支えてくれた関係者や周囲への感謝と充実感にほんのりと酔っていた。ロシアの旅を締めくくるのにふさわしいモスクワ川クルーズとなったのだった。